

ジュッペちゃんの涙（平成24年2月11日号）

大中里保育園 園長 塩川寿平

子育て支援事業 富士宮市民の集い

子育て講演会テーマ：

子も親も幸せになれる「子育ち」と「子育て」

～試して 失敗して 感じる体験～

講師：塩川寿平（大中里保育園園長・元静岡県立大学教授）

こども環境アドバイザー資格（こども環境学会＝資格認定番号 No.090017）

1. まずはじめに『子育ち』と『子育て』の違いについて述べよう

今までは大人が子どもを育てるという観点から「『子育て』する」という大人が教えるという直接的教育を重視してきました。その結果、受け身となり指示待ち症候群の子どもが増えるという弊害が目立つようになりました。そこでこれからは自主性や主体性を育てるために子どもが自ら「『子育ち』する」という観点から、大人は保育環境を整備して『待つ』という間接的教育が大切であることに気がきました。

そこで、自由な時間と環境の中で子どもは選択して遊び始め（＝保育環境に自ら挑戦し個性と能力を磨き）、自ら「『子育ち』する」のです。もちろん大人が教える直接的教育も内容により必要ですが、同時に子どもが自発的・主体的に保育環境に挑戦し、大人が見守る間接的教育も重要だという事を忘れてはなりません。理想的な教育とはこの直接的教育（50%）と間接的教育（50%）の両者のバランスの上に成り立っているのです。

2. 試して 失敗して 感じる体験 の『遊びの大切さ！』について

大中里保育園の保育実践を紹介することを通して、『遊ぶ中での子育ち』についてお話しします。子どもは木登りも、水いたずらも大好きだ。泥んこ遊びも、ままごと、木切れや丸太で基地を作る遊びなどしながら、試し・失敗し・感じる色々な体験をしていく。そんな友達と群れて遊ぶ姿をたくさん展示しますので、子どもの本当の姿を理解ください。

【普光院亜紀著＝保育を考える親の会代表（保育専門雑誌「保育界」2011.12.1）より参考】

「運動指導」は運動能力を育てない

鹿屋体育大学の森司朗教授の研究グループが、保育所と幼稚園の園児 15,000 人を対象に行った運動能力検査で、意外な結果が発表されています。「運動指導を行っていない園」の園児の方が、「運動指導を行っている園」の園児よりも運動能力が優位に高かったということです。また、園の保育形態を「子ども一人ひとりが自由な活動をする遊び中心の園」と「クラス全員が指導者の決めた同じ活動をする一斉保育中心の園」に分けて調べた調査では、後者の方が運動能力が低い結果となったそうです。

これらの調査結果は、保育所保育指針が子どもの主体的な活動を重視していることの正当性を裏付けています。私（普光院）は、たくさんの保育園の見学をさせていただいていますが、子どもが自ら楽しんで動いているときの運動の多様性・運動量は、「指導」では再現できないと感じてきました。また、豊かな保育環境のもとで、子どもが自由に遊んでいる時の集中力、知性の働きにも、大人の指示や管理が強い教育活動のもとでは見られない輝きがあると思っています。【普光院 亜紀著】

3、我慢する心の育て方。心のブレーキを育てることの大切さについて

赤ちゃんの一人称人格（自己中心）時代から、相手の立場に立って行動する二人称人格（友達遊び）時代へ。友達と遊べば・・・「強調する心」「我慢する心」が育ちます。

子どもはケンカの専門家です。一人称人格は自己中ですから、「ボクのモノだい！（おもちゃの引っ張り合い）」「ワタシが先よ！（ブランコの取り合い）」と何でもかんでも利害は対立します。でもこのケンカが社会性を育てるのです。すぐ止めてしまったら過保護・過干渉です。放任するのもいけません。保育者はケガをしないように見守りながら、どうしたらよいか「かわりばんこ」「順番」「貸してあげる」等々のお友達と遊べるルールを日々少しずつ保育していきます。相手の立場に立って考えられる子に育てていくのです。

4、『家庭の歴史を教育』することを忘れてはいませんか！

『家庭の歴史を教育』するとは、・・・不平不満の子どもが増えていますが、不平不満の子どもに限って、自分のルーツを知らない子が多いのに驚きます。現在の自分の家庭を築いた先祖～祖父母～そして父母の努力と忍耐と家庭愛の歴史を伝えることを今日ほどおろそかにしている時代はありません。不平不満を言う前に「自分の家庭の歴史」に感謝することを伝えることです。そのためには家族と親戚の大人たちは「我が家のルーツ」を子どもに伝えることです。『家庭の歴史を教育』とは、自分の家庭の歴史そのものを教えることなのです。教育を集団教育ばかりに任せていませんか？・・・それは問題です。

他人に任せる集団教育（保・幼・小・中・高・大学）は、どうしても競争原理が働き「ナンバーワン教育」になります。競争原理も肯定しなければならない面がありますから、それなりに立派に教育しているので、他人に任せる集団教育の現状に文句はありません。

しかし一方、家庭でなければできない教育があります。①「かけがえのない家（ウチ）の子＝みんな違



ってみんな良い」という真理 ②他人の家庭を「うらやましがるな」「ねたむな」という真理 ③不平不満を言う前に、先祖から繋がっている努力と忍耐と家庭愛の歴史を評価して「感謝する心」「足るを知る」「分相応」「平安」「オンリーワン」という真理を育てることです。

集団教育が「ナンバーワン」を目指すことも良いことですが、一方の家庭教育では「オンリーワン」を育てることを忘れてはなりません。両者の教育は共に調和することが必要なのです。その調和の割合は『ナンバーワン教育を50%』『オンリーワン教育を50%』と心得るべきです。

公的な集団教育の場で行う「オンリーワン教育」は他者と比べる評価の段階で崩壊します。集団教育ではどうしても序列をつけます。進学に際しては選別しますので、いくら学校で「オンリーワン」と唱えても、児童生徒本人には実感がわからないのが実情です。集団教育でも「オンリーワンは大切です」と言っていますが形式的で空回りしています。

一方、家庭という肉親の愛情に包まれた信頼関係で伝えられることによって、「オンリーワン」の精神は心にしみこむように伝わります。不平不満を言わない子どもを育てるには、『公的な集団教育』と『私的な家庭の歴史を教育』することの調和が大切なのです。

